

序

この所報も19号を重ねるに至ったが、それをみても研究のやり方には、いろいろ違った性格のものがある。

例えば、理論的解析を主軸として、実験はこれを確める補助的手段と考えるものがある一方、実験実証をもって組み立ててゆき、その中から普遍的なものを見つけて、色取りをするというものがある。

また、最初に目的を具体的に定め、それに対する最適の方法手段を探求して行くというやり方は、まことに理にかなったものと思えるが、現実には逆に、手段となるべきものが先にあって、その利用価値を探して歩くというものも随分とある。

こうした違いは、研究者個人の性格、研究の対象、さらにはその分野での習慣などによって生じているように思える。どちらの方法が、本来あるべき姿かということについては、いろいろと議論があろうが、またそれを無理にきめなくてもよいのではなかろうか。

むしろ、ときには反対の立場に身を置いて見るのが、研究を進める上に、意外に役に立つことがあるのではなかろうかと感じている。

1972年4月

清水建設株式会社研究所 所長

工学博士 烏 田 専 右